

## 『微笑み』

メルクス公爵領の都城メルクスは雑多な空気に包まれていた。巨大な赤き竜ロスペロツソに襲われた地方にもっとも近く、もっとも大きな、という事はもっとも守りの堅いこの都市にありとあらゆる難民が押しかけてきているからだ。

通常、これらの難民は様々な問題の種になる。食い扶持が増える為に生じる食料費の高騰。野宿、排便の不始末などの不衛生な環境から発生する疫病。

それらを原因とする難民同士、あるいは原住市民と難民のいさかい、騒乱。その全ては為政者たちにとって悩みの種であった。

しかしメルクスにおいては趣きが異なる。

公爵政府は要領よく都城南側の空き地を整地し、あたかももう一つの都市を作り出すように難民たちを整理し、粗末ながらも天幕などを支給して当座の住まいを提供していた。

水道もひかれ、公衆便所も厳密に定められ、近郊の農家が野菜などと交換にそれらの汚物を引き取り、公衆便所を利用する区画の難民達に配布された。

しかも難民達はただ暇を持て余すだけでなく、難民達の居住地を囲むように新たに建設される城壁づくりの人夫として日雇いながらも賃金をもらう事ができるので、最低限の収入を得る事ができた。

食品の価格は、一旦公爵政府が買い集め、それまでの市価よりも低い最高価格を設定して販売を許可する形をとられた。商人たちには不評だったが、しかし難民は元より従来の市民まで価格の下落を喜ばないはずはない。

いまやメルクス公、ジャーノの人気は天井知らずであり、彼こそが『天使王国』を再建する英雄となるという評判があたりに広まっていた。

当のジャーノ公もご満悦である。

全て『ワーム』と名乗る吟遊詩人の少年に任せていたら、何の問題もなく民の人气が日に日に良くなるのだから、虚栄心の塊である彼がよるこばない筈はない。

しかも難民対策や土木工事にかかる諸経費がまったく公爵の財布から出ていないのだから、機嫌が良くなるのも当たり前である。

『ワーム』の下で地獄の釜を開けるべく、都城メルクス全体に魔法陣を施している召喚術師も実際不思議に思っている。彼は建設現場の監督たちに凶面を指し示して新たにつくる城壁が魔法陣の一部として機能するよう働いているのだから、実際に金のやりとりを見ている筈なのだが、それでも不思議に思えてならない。

『ワーム』から提供された資金は幻でも贖金でも何でもなく、本物の金貨なのだから。

「・・・悪魔というものは、このように金貨を汲み取るように得る事ができるものなのですか？」

召喚術師は何気なく『ワーム』に尋ねた事がある。だが彼は不思議そうな顔をするばかりだ。

「へー、そうなんだ。そいつは便利だね」

「便利だねって、私が聞いているのですが・・・」

「ああ。無から有を生み出すなんて、そんな事、地獄の諸君主方はおろか、神々にだってできないさ。もしできていたら、幾多の多次元で展開されているこの戦争そのものに意味がなくなる。

自分たちに都合のいい世界を、いくらでも生み出せばいいのだから。それができなくて有限の世界を奪い合っている。それが我々の戦争の実態さ」

「では、この金貨は何処から得ておられるのです?」

「タネを明かしたら有り難味が薄れるじゃないか」

『ワーム』は悪戯を見咎められた子供のように機嫌を悪くする。しかし次の瞬間にはあっけらかんとして言い放った。

「まあいいけどね。大した事じゃない。ロスペロツソが破壊してまわった都市から火事場泥棒しているだけだし」

「は?」

「いや色々瓦礫の中から使えそうなものを発掘して商売している人間が多くてね。

こいつはいいやと、何体か下級悪魔を放って奪わせているんだ。もちろん色々な手段で集めさせてもいる」

「なるほど・・・」

「そりゃあ悪魔だってただじゃ動かないし、脅すだけでやらせるといのは芸もないし、

お駄賃として野垂れ死にした難民の魂を回収したら僕に捧げなくても、自分の物にしていい事にしてやったけどね」

『ワーム』が地獄の大物である事は、召喚術師にも解っている事だ。

人間の都市をいくつも蹂躪できるロスペロツソのような強力な半竜半悪魔も動かせるし、仕事の合間に雑用をさせる為に最下級の悪魔を彼は召喚しているが、

以前は手間取ったのに『ワーム』の名前を出せば事は簡単に運んだ。生贄さえ用意せずに呼び出せるのだ。これには驚いた。

ところがこの『ワーム』という赤毛の少年の姿をした地獄の先触れは、舌を巻くほどに芸が細かった。

何一つ無駄にする事無く、言ってしまうは多少せこく計画を立案、実行している。

いかに効率良く生贄の人々を集める為とはいえ、こうまで人間達に『善政』を施す悪魔など見た事はなかった。

だが、それでもやはり悪魔なのだ。その事を召喚術師は自らの質問で思い知った。

「そういうばロスペロツソ殿が手酷くやられたとか。治癒呪文を使いこなす者を何人か寄越すように連絡を受けましたが・・・」

「放っておけばいいよ」

赤毛の少年は事もなげに言い放った。

「それはどういう・・・」

「たかが人間にやられるのは彼自身の問題だろ?何かくれるから回してくれとか、

そういう話じゃないんだろ?なら無視すればいいさ。彼はちゃんと自分の役割を果たしたよ。

この上なく上手くね。このままやられると多少同情するが、まあそれも仕方ないという事で・・・っと、そうだ!

人々を苦しめた悪竜が滅ぼされたなら、お祭りをしないとね!これでまた仕事が増えて人が集まるよ。

いやはや、ロスペロツソは最後までいい仕事をするねえ」

『ワーム』は盟友ロスペロツソの生死など眼中にないと云うどころか、

彼が滅ぼされる事すら自らの策略に組み込もうとしている。召喚術師はいささか背筋が寒くなってきた。

「ロスペロツソ殿が恨まなければ良いのですが・・・」

特に魔法による儀式を施さなくても、無念の思いが強ければたやすく死霊化する事は可能だ。

強力な竜であり悪魔であるロスペロツソが倒された時に怨霊化すればやつかいな事になる。

しかし『ワーム』はその懸念を一笑に付した。それもこの上なく明るく。

「恨んでどうするのさ。僕を逆恨みして襲い掛かってくるとか考えちゃっている？」

お心遣いはありがたいが、見当外れというものだよ。

そんな死に損ないに殺されるようでは、地獄の先触れは務まらないし、悪魔でいる限り地獄の位階は絶対なんだよ。

上に逆らい、上位者を滅ぼして権力を握る事ができなければ、一生浮びあがる事のない存在になるか、

あるいは永遠の消滅が待っている。魂だけになったとしても彼も悪魔だ。

悪魔には悪魔の身の処し方しかできないんだよ？」

酷く嬉しそうに言う『ワーム』の言葉を聞いて、召喚術師は背中に気持ちの悪い汗をかいている自分を見つけた。

彼は巨大な悪魔であり地獄の位階でも諸君主たちを除けば最高位に属する『ワーム』に尽くす事で、  
自分も上位悪魔となり、脆弱な人間の殻から抜け出そうと望んでいる。

だが『ワーム』の言葉を聞くと、悪魔になる事が本当に巨大な力を手にする早道なのかどうか疑問に思えてくる。

上位悪魔になるうとも、結局さらに上位の悪魔にこき使われるだけの存在になるのではないだろうか？そんな不安が頭を過ぎる。

そして彼の不安を楽しむように『ワーム』は微笑んだ。

「まあ、ロスペロツソの事は彼自身に任せるさ。ひよつとしたら人間なんて一蹴して報告にくるかもしれないね。  
そうなたらちよつと奮発してご褒美をあげないとねえ」

赤毛の少年は、その笑みだけを見るならば、まったく影もなく明るい天使のような表情を浮かべている。

それが召喚術師にはたまらなく恐ろしかった。どんな不気味で奇怪な怪物たちよりも、この目の前の少年が恐ろしかった。

これが悪魔のだと、彼はその時思い知った。

探索はあらゆる手段を講じて行われた。もはやドウルワイトはおろかりユイシスも渋りはしない。

自らの手持の呪文では足らず、いつも持ち歩いている異次元に直結している袋の中にしまいこんだ、

彼の命の次に大切な魔法の書を何冊も取り出し、ありとあらゆる占術呪文でロスペロツソの居場所を割り出そうとしている。

トウルスとボルメリアは彼らの探索結果を静かに待っていた。二人はもはやどんな言葉も交わさない。

ただロスペロツソを殺す事だけを考えていた。

仲間の中で一人だけ浮いているのはクレドネエだ。

もはや人外の荒地に飛び去ったロスペロツソの行方を捜すのに彼の聞き込みは不要だ。

そしてイリネアが殺された事は残念には思うのだが、それも自分の命に関わらない範囲での哀悼しか持たない彼にとって、

他の仲間たちの復讐など付き合いきれるものではなかった。

だが彼が仲間の下を離れないのは、無断で立ち去る心苦しさ、迂闊に不平を言おうものならトウルススの巨大な剣で挽肉にされかねない危険の為だった。

実際トウルススの怒りは端で見てもひしひしと感じられた。彼を取り巻く空気自体が震えているようでもある。自らの行動で彼はイリネアを死に追いやったようなものだ。

トウルスは自分を許せない気持ちも合わせてロスペロツソへの憎しみを焦がしていた。

普段ならばボルメリアはそんな彼を嗜める筈である。

怒りや憎しみに身を任せる事は危険だと、戦士として正規の訓練を受けた軍神の下僕は指摘する。ところがいつも冷静なボルメリアすら静かな怒りに我を忘れてしまうようなのだ。

仲間を守る事こそ我が役目、最初に死ぬ事こそ我が立場。そう考えていた彼女の目の前でイリネアは死んだのだ。善なる軍神の下僕、天使の眷属、そして聖なる騎士としての誇り、責任。

それらを傷付けられ、全うできず、彼女は悔やみ怒り、その他様々な負の感情を自分の中で闘志に転換しようと必死だった。

重苦しい空気の中、クレドネエは耐え切れず何度も二人から離れようと思ったが、しかし離れた途端、何をされるか解らないといった恐怖まで感じていた。

きつとそれは、自分が他の仲間と思いを同じくしていないという後ろめたさから感じているのだと思う。結局のところ、彼は二人と一緒に待つしかないのだ。

「解ったぞ・・・」

魔法による探索を開始して一日が終わろうとする時、リュイシスが三人の下に現れた。他の二人は気にならない様だったが、クレドネエからすればたった一日でやせ細り憔悴しきった顔にリュイシスがなってしまうなど狂気の沙汰だ。

イリネアを仲間以上に愛していたリュイシスは、この探索に自らの持てる能力全てを投入したのだろう。

そう。狂気なのだ。クレドネエ以外の仲間達を支配しているのは復讐心という名の狂気なのだ。

「ルクスオール山脈の中腹に、奴自身がつくりあげた洞穴がある。そこに傷ついた奴がいる」

リュイシスの端的な言葉にトウルスが嘔み付いた。

「そこまで案内してもらえらんだらうな？」

「当然だ」

二人の男が交わした視線は冷たく、氷のようだ。しかし復讐という言葉だけが二人を繋ぎとめていた。

「ご苦労様でした。明日、夜明けと共に発ちましょう」

ボルメリアの提案は常識的だが、それでもクレドネエはげんなりする。朝寝できないというのはなかなか厳しい。しかしリュイシスはそんなボルメリアを笑った。

「幻影の乗馬を呼び出す。普通の馬の二倍は走れる。今から休めば、俺は夜明け前に呪文を用意できる」

つまりリュイシスは夜明け前に発とうと提案してきたのだ。

トウルスやボルメリアにとっては望むところであるが、クレドネエにとっては更にげんなりである。何も夜明け前に死地に向かつて、しかも必要以上に急いで行く事はないだろうに……。

だがそういった発言は飲み込んだ。

疲れきったリュイシスの後に隠れて、やはり目の下に隈をつくったドウルワイトが静かにクレドネエを見ているからだ。

無理をする事はない。嫌ならば帰ればいい。

ドウルワイトの瞳はそう言っている。クレドネエは、どうしてもそれに従う事ができなかった。

ここで仲間と別れる事は、人としてやってはならない事のように思えたからだ。

不満ながらも彼は黙ったまま。ドウルワイトはそれを見透かすように佇んでいたが、やはり何も言わなかった。

仲間たちは、ただ明日に備えて睡眠をとった。ただ疲れをとる為だけの眠り。

そこには安らぎはなく、復讐の刃を研ぐ時間しかない。

その事に不安を感じていたのはクレドネエだけだった。

ロスペロツソは苛立っていた。傷ついた彼の体を癒す術者を寄越すように何度も『ワーム』に呼びかけているが答えがない。それではと、『ワーム』と一緒に行動している下級悪魔たちに呼びかけるが、

こちらもまったく音信不通だ。それならば『ワーム』が使っている人間どもを脅そうと、複数の召喚術師たちに呼びかけたのだが、彼らは気弱そうに呟くばかりなのだ。

今は手が一杯で、そちらに人手を回す事ができない、と。

「何だと！虫けらのようなお前たちが、俺の命令に逆らうのか」

「いえいえ、召喚陣の作成を最優先にするように、との『ワーム』殿の命でございます。

予定よりも規模が二倍になりまして、手も費用も八倍は必要になっております。とてもそちらに回す人手は……」

「治癒呪文を使う者を一人回せばいいだろう！ たったそれだけの事じゃないか」

「大変、申し訳ございません。あ、そういえば『ワーム』殿より伝言が」

「何だ！」

「『大変よくやってくれた。おかげで予定の倍の魂を集める事ができそうだ。ありがとう』 以上です」

「くそっ！それなら術者をよこしやがれ」

だがロスペロツソの罵声に人間の召喚術師は悲鳴を上げて消えてしまうばかりだ。

彼は焦っていた。隠れ家である洞穴には探索系呪文に対する防御がまったくなされていない。

そして昨日、彼は明らかに自分を見ている視線を感じた。誰かが自分の隠れ家を発見したのだ。

自分の味方がこんな手段をとることはない。ならば自分の敵が見つけたという事だ。

傷ついた体を癒す事は、魔法の薬を使ったり自らの絶倫の体力に頼れば、何とかならない事はない。だが切断された翼を治すには治癒呪文が必要だった。それも高位の強力な再生呪文が。

肉弾戦に頼り、戦闘中に魔法を使うなど時間の無駄と考えているロスペロツソには、呪文を使いこなす力がない。この隠れ家に敵が辿り着く前に翼を治す事ができなければ、彼は地べたで敵を向かい撃たなければならないのだ。

相手が人間であるならば恐ろしくはない。一方的な殺戮にはならなくとも牙や爪、強力な尾でなぎ払う事も可能だ。

しかし空を飛ぶ利点は様々ある。万全の体制で、全力で戦うのがロスペロツソの信条だ。それを封じ込まれるというのは痛い。

「くそっ、『ワーム』め。まさか俺を切り捨てるつもりじゃあるまいな・・・」

考えられない事ではない。悪魔には信義はない。ただ利用し利用されるだけの間柄なのだ。

それを指して裏切り行為と罵る事はできるが、ロスペロツソに反撃の力がなければ、負け犬の遠吠えに過ぎない。悪魔の世界は過酷な支配と競争原理でできているのだ。

「ちっ、そっちがその気なら俺にも考えがある。目に物見せてやるぜ」

ロスペロツソとて強力な悪魔である。自分たちの行動原理は心得ているし、そうされた場合とるべき行動も知っている。自らの力のみで全てを蹂躪できたから、今までやらなかっただけだ。

その点、ロスペロツソには『ワーム』の行動が不可解だった。『ワーム』はロスペロツソをも遥かに凌ぐ力を持つ。

彼に対抗できるのは、神々か地獄の諸君主ぐらいなものだろう。

それだけ強力な力を持ちながら、『ワーム』はいつでも策略を弄する。

ロスペロツソにしてみれば手間のかかる無駄な事にしか見えない。

だが彼に言わせれば、自分が楽をする為にやっているのだという。

自分の事を『怠け者』と称するのが『ワーム』の癖だ。

性格の違いといえればそれまでだが、自分の手で何もかもやりたがるロスペロツソと、他人を動かして策略を弄する『ワーム』は、やはり違うのだ。

それが悪魔としての格の違いであるとは、ロスペロツソは気付いていない。ただ『ワーム』への復讐ばかりが募るのだ。

「こうなれば、お前の企みが潰えようが何だろうが、なりふり構わずやらせてもらう」

ロスペロツソは暗い闇の中で凶悪な笑みを浮かべた。暗い情念こそが悪魔の本領。

彼は仲間を、いや上司を裏切る背徳の感情に喜びを覚えていた。

『天使王国』西の辺境に位置するルクスオール山脈。

その中央にトゥルスを先頭にボルメリア、リュイシス、ドウルワイト、そしてクレドネエが立っていた。

目の前には目指す洞窟が開いている。クレドネエは注意深くその洞窟を見た。自然に出来上がったものではない。

何か高熱のもので掘削されたように洞窟壁面は溶けている。

ここがロスペロツソの隠れ家なら、相手は自前で巨大な洞窟を作り出す力があるという意味にもとれる。

奴が自分の炎のプレスで掘ったのだ。その威力を想像してクレドネエはぞっとした。

解ってはいたが、とんでもない死地に来てしまったようだ。

だが躊躇する彼を残し、仲間たちはためらいもせず中に入っていくこうとする。これには慌てた。

「おいおいー何の準備もせず、真正直に正面から乗り込む気かよ。ちったあ作戦を考えるとか・・・」

言いかけたクレドネエの言葉をリュイシスが呪文で遮る。

何の断りもなく魔法をかけられて不愉快になるのだが視界に感じた違和感でそれどころではなくなった。外の光が差し込まない洞窟の奥の方まで、クレドネエは解るようになっていた。見えるというのではない。頭の中で感じるというのが正しい。

「暗視の呪文だ。相手は超感覚でこっちの居場所をつかんでくる化物だからな。

少しでも早くこちらが奴の位置をつかめないと、一方的に攻撃される事になる。お前が一番目敏いんだからな。頼むぞ」

続いてドウルワイトが言う。

「炎への耐性を上げる呪文を朝唱えておいた。一日は持つはずだ。

あとは幸運を上げる呪文ぐらいかな、事前に唱えておけるのは。

相手を見つけたら勇気を鼓舞する呪文をかける。あとは治癒呪文かな？」

「準備はとっくに終わっているんだ。どうせ小細工の通じる相手でもない。解ったら先頭に立て。時間が惜しい」

最後に言い放つたのはトウルスだった。有無を言わずクレドネエを連れて行こうとする。

思わず助けを求めるかのようにポルメリアを見るが、しかし彼女の青い瞳にもクレドネエへの期待はあっても哀れみはない。

ここまで来てしまったからには抗うのも無駄な行為だ。溜め息をついたクレドネエは仲間たちの先頭に立つて歩き始めた。

洞窟はかなり深い。

クレドネエは罫やロスペロツソの配下がわらわらと待ち伏せている迷宮を想像したのだが、そんなものはなかった。

己の力のみを頼むロスペロツソは管理が面倒と部下を持たないし、罫など不要と思っていたから、

洞窟は本当に通路の意味しかなかったのだ。

これなら探索の意味はないだろうとクレドネエは思う。

相手はこの通路のどん詰まりに鎮座しているに違いない。

いくら巨大な洞窟とはいえ、ロスペロツソが身を潜めるほどの広さはないのだから。

しばらく進むと不意にポルメリアが口を開いた。

「いた」

天使の眷属である彼女には暗視の能力がある。

探索能力はクレドネエの方が高い筈だが、

やる気のない彼よりも臨戦態勢にあるポルメリアの方が五感が鋭くなっているという事だろうか？

普段ならクレドネエは皆から非難がましい目で見られるだろう。彼ならもつと早く発見できた。

だが誰もそんな事を言わなかった。そんな時間が惜しいというように散開した。

相手の炎のプレスで焼き払われるのを防ぐためだ。やや遅れたがクレドネエも散る。そして岩陰に隠れる。

しかしそんな仲間たちの反応を嘲笑うように童の声が響いた。驚いた事に人間の言葉を話してくる。

「今更隠れたところで無駄だぞ、人間ども。お前たちが来た事はとうにお見通しだ」

リュイシスは違和感を覚えた。

解っているなら先制をとって攻撃してきてもよさそうなのに、何故待ち構えて、しかも声をかけてきたのか？

話し掛けてきたという事は、問答無用の戦闘を相手が望んでいないという事だ。

先日の傷が癒えていない為に援軍でも用意しているのか？その為の時間稼ぎだろうか。

クレドネエ以外の全員がそう考えたようだ。誰もロスペロツソの言葉には答えず、洞窟に散ったまま更に接近する。

このまま進めは相手も躊躇わずに炎のブレスを吐き出してくるに違いない。

クレドネエにはそれをかわす自信があったが、しかし危ない事を自ら望んでやる気は彼にはない。

クレドネエは咄嗟に大声を上げた。

「お見通しならどうなんだい？何か耳寄りな話でも聞かせてくれるのかい？」

ただの軽口だ。相手が付き合ってくれるかどうかは解らない。仲間たちが接近し過ぎればロスペロツソは戦闘体勢に入るだろう。だがロスペロツソはクレドネエの呼びかけに乗った。接近されても撃退する自信があるのか、それとも本当に何か話があるのか。

「そうだな、一ついい事を教えてやろう。お前たちにとっても興味深い話だと思っがな」

「へーえ？どんな話なのかな？」

クレドネエはお義理で洞窟をしばらく進んだ後、大きな岩陰に入ってそのまま足を止め、ロスペロツソの声に答えた。仲間たちは構わず接近を続けている。話を続ける事は多少なりとも攪乱になるだろう。

だが炎のブレスの射程に入れば、ロスペロツソは容赦なく炎を吐き出すに違いない。その巻き添えはごめんだった。

「俺を倒したところで何にもならないって話だ」

鋭いクレドネエの耳には仲間たちが思わず足を止めた事が解った。かすかな足音が途絶えたからだ。

ロスペロツソに襲いかかれる間合いとなったのか、それとも相手の話に興味を覚えたのか、それは解らない。

クレドネエは続けた。

「どっという訳だ？」

「俺は『ワーム』という奴の指示に従って暴れまわったに過ぎない、という事だ」

「だからっ？」

そう返事をしたのはクレドネエではなくトウルスだった。

その事にクレドネエが一番驚いた。

リュイシスとともに一番復讐したがっている彼がロスペロツソの話に応じるとは思わなかったからだ。

ロスペロツソの方もクレドネエ以外の声が答えた事に力を得たようだ。彼は更に言いつのった。

「奴は今、地獄の軍勢を引き入れる恐るべき計画を練っている。

計画が実行されれば、人間の世界など一たまりもなく征服されるだろう。俺なんかに関わりあっている暇などないぞ」

これを聞いて動揺したのはポルメリアだった。彼女は『ワーム』という少年の姿をした圧倒的な『悪』の化身を知っている。もしもロスペロツソが話す『ワーム』と同一の存在であるならば、それは決して彼の言い逃れとは判断できない。



かつての師ランカスタードの城で相対した赤毛の少年の存在感は圧倒的だった。彼女自身卒倒してしまうかと思うほどの衝撃を受けた。それはロスペロツソ以上の威圧だった。

そんな『ワーム』が『天使王国』征服を企むとなれば容易な話ではない。思わずポルメリアはその先を促そうとした。それを見越したようにロスペロツソは言葉が続ける。

「もし、俺を見逃してくれるなら、その計画の全貌を明らかにしてもいい。奴が何処にいるのかも教えてやる。どうだ？『世界を救う勇者さま』なら、どちらを優先すべきだ？」

ポルメリアは息を飲み、そして迷った。北方辺境を壊滅させ、トゥルスとイリネアの人生を破滅させ、尚且つイリネアの命を奪ったロスペロツソは憎んでもあまりある『悪』である。

だがそんな彼は更に巨大な存在、『ワーム』に命じられるまま動いていたのだという。

どちらを優先して滅ぼすべきなのか？イリネアを殺された私怨をとるべきか、もしくは『天使王国』に仕掛けられた陰謀を打破すべきなのか。

しかし、彼女が迷っている間に決断したものがいた。トゥルスはポルメリアが口を開く前にロスペロツソに向けて怒鳴った。

「うるせえ！何か勘違いしていないか？世界の事などどうでもいい。

地獄の軍勢が攻めてこようがどうしようが、今の俺には関係ない。

だがお前を見逃すなんてありえない。お前は、俺の家族を、人生を台無しにしてくれた。そしてイリネアを俺たちの目の前で殺した。

お前を見逃す理由はないが、お前を殺す理由には困らないぜ」

トゥルスの言葉に、今度はロスペロツソが困惑した。自分は善なる軍神の使徒とその仲間を引きつける役を担っていた筈である。世界の危機を持ち出せば絶対にひっかかると思つて交渉をもちかけたのだ。ところがトゥルスはそんな事は関係ないという。

それでは、ロスペロツソは二重に『ワーム』に誑かされたという事なのだろうか？

トゥルスの言葉を肯定するようにドウルワイトもリュイシスも再び歩み始めた。

しばらく迷ったポルメリアだが、やはり仲間たちと行動をとるにする。

都市を滅ぼし人々を虜り殺し、思う様に蹂躪したロスペロツソは傷ついてこの奥にいる。

奴に慈悲をたれるいわれはない。善なる軍神の下僕として、人々に悲劇をもたらす『悪』は滅ぼすべきだ。

『ワーム』とロスペロツソの関係は気になるが、それはそれとして柵にあげる事にした。

目の前のロスペロツソを滅ぼす事こそ、今はやるべき事なのだ。

歩みを止めない彼らにロスペロツソは慌てた。そして再度呼びかけた。

「善なる軍神の使徒がそこにいるんだろう！より巨大な『悪』の存在を教えようというのに、何故答えない？」

暗視でポルメリアはロスペロツソとの距離を測った。一足飛びに突っ込んで先手をとれる位置にある。

彼女はロスペロツソの問いには答えず、自らの前に剣を掲げ、そしていつもならば呟くその言葉を、はつきりとした大きな声で告げた。

「夢もなく恐れもなく、ただひたすらに剣をもて悪を討つ。今、この瞬間、その悪とは貴様のことだ！」

銀色の大剣を構え、自らの迷いを振り払うようにポルメリアは真っ直ぐにロスペロツソの巨体に向かっていった。振り払うロスペロツソの爪をかくぐり、その赤く堅い鱗を穿つように、深々と剣を突きたてる。それが合図となった。

ドウルワイトが勇気を奮い立たせる呪文を放つ。リュイシスは速度を与える呪文を唱えた。トウルスがポルメリアと対角になるよう、挟み込むように回り込む。

痛みにうめき、怒りに燃えたロスペロツソが咆哮と共にポルメリアを殴る。

巨大な半悪魔の竜が放つ恐怖に仲間たちは耐えた。

剣を突きたて身動き取れぬポルメリアはもとにもロスペロツソの一撃を受けたが、それでも怯まなかった。手にした剣は手放さず、受けた一撃の力を利用して剣をロスペロツソの体から引き抜く。

そしてロスペロツソの右腕を奪うべく剣を振るった。

大きなダメージを受けたポルメリアにはドウルワイトの回復呪文が飛ぶ。

リュイシスの寒冷攻撃呪文が飛ぶ。トウルスがロスペロツソに残されたもう一つの翼を奪うべく巨人の大剣で殴る。

だが、この戦いの中でクレドネエだけが離れた岩陰で息を潜めていた。

不意を討つような形で仲間たちはロスペロツソに立ち向かっていった。

ポルメリアやトウルスの剣は深々とロスペロツソをえぐっているようだし、

リュイシスの攻撃呪文も魔法障壁に遮られて十分ではないが、それでも効果を發揮しているらしい。

けれどもクレドネエは仲間たちと一緒に戦おうとはしなかった。正面から殴り合っているポルメリア。

仲間たちの中で一番重装甲で、しかも『悪』の力を込めた武器でなければ完全なダメージを受ける筈のない彼女が、ロスペロツソのたった一度の攻撃で重傷を負っているのだ。

ドウルワイトの回復呪文で、その傷は瞬く間に治っているが、

しかし彼女の重装鎧もロスペロツソの攻撃をかわし、しのぐ事はできない。

翼をもがれたも当然のロスペロツソは、その巨大な尾でトウルスを殴る。軽装の彼はそれだけで半死半生になってしまう。

ドウルワイトの治癒呪文があるうちは、それでもいいだろう。だが、それもいつかは尽きる。

ロスペロツソが力尽きるのが早いのか、ドウルワイトの治癒呪文がなくなるのが早いのか。

クレドネエには怒り狂い、凶暴な破壊力を撒き散らすロスペロツソが力尽きる事など想像できなかった。

つまり、仲間たちは負けるのだ。

仲間を見捨てて逃げ出すほど卑怯ではなかった。だが仲間と共に命を賭けて戦うほどの勇氣もなかった。

彼は雄叫びをあげて殺し合う彼らの様から目をそらし、耳を塞ぎ、ただ岩陰で慄くより他なかった。

ロスペロツソの首がトウルスでもポルメリアでもない方向に向いた。誰を狙っているのか彼女には想像できた。

おそらく前衛二人を回復させるドウルワイトを狙っているのだろう。

炎のブレスを浴びせられるドウルワイトが助かる見込みは低い。

トウルスやクレドネエといった身軽な軽戦士ならばともかく、

僧侶のドウルワイトは、それこそ幸運の神に願うより手段がないのだ。

ポルメリアはドウルワイトの運を信じる事にした。

そして深く傷つき、満足な攻撃ができなくなった右腕同様、ロスペロツソの左腕も奪おうと突進する。

それが成功すれば、もはやロスペロツソの攻撃手段は牙と尾しかない。勝てる！ポルメリアはそう確信した。

ロスペロツソの口から吐き出された炎がドウルワイトがいた辺りをなぎ払う。

小さな盟友がどうなったのか彼女には解らない。一心不乱にロスペロツソの左腕を剣で殴る。だが、どうした事か彼女の攻撃は不運にもはずれた。手元が滑っている？

そこで彼女は自分の手甲が血で濡れていることに気がついた。傷は癒えても流された血はそのままだ。リュイシスの冷氣の攻撃呪文をかわし、トゥルスを尾であしらったロスペロツソの巨大な口が、一瞬戸惑い動きが止まった。ポルメリアを見逃さなかった。

その鎧ごと彼女は鋭い牙で武装したロスペロツソの口に捕らえられた。赤き竜の咀嚼力は彼女を一瞬にして粉碎した。鎧越しに自分の肋骨が砕けていくのが彼女には解った。

自分の口から逆流したとは思えぬほどの量の血潮が、地面に滴り落ちていくのが見える。

新たな敵に対処しなければならぬロスペロツソは、そんな彼女をゴミ屑のように捨てた。

暗い洞窟に投げ捨てられた彼女はおぼろげな意識の中で、咆哮したトゥルスがその巨大な剣をロスペロツソの脳天に打ち下ろしているのを見た。

『龍殺し』、ようやく宿願を果たしたのだな。

善なる軍神よ。悪竜との戦いで力尽きる私をお許し下さい。

願わくば、貴方のおめがねに合った戦いを、私が果たしてきたのだとお褒めいただければ……。

だがこの期に及んでも、彼女の神は答えなかった。既に光を失った彼女の青い瞳は何も見ることができない。遙かに聞こえる断末魔の咆哮がロスペロツソのものであると信じて、彼女の意識は途絶えた。

洞窟一杯に広がった断末魔に耳を塞ぎ、クレドネエは岩陰に隠れたままだった。

だがその咆哮を最後に物音は何一つなくなる。恐る恐る岩陰から顔を出して見ると、彼が見る事できる範囲で動くものは何一つなかった。

ロスペロツソの赤い巨体は洞窟に横たわったまま、身動き一つしない。

かつて仲間だったかもしれない何か散乱しているが、人の形をしているものは彼の視界には入らなかった。

足音を忍ばせ、恐る恐る彼を近付く。ロスペロツソの頭は完全に砕かれていた。

脳漿を飛散させて鋭い牙がならんだ口から、だらしなく舌を垂らし、完全に事切れているとクレドネエは納得した。

もう一度辺りを見回す。動いているものは何もない。ロスペロツソの傍らに立っている彼を除いて。

「……結局こうなっちまったのか。だが相打ちでも倒すとは大したもんだぜ。

まあ、この化物の始末は俺がやっておく。安らかに眠るがいいぜ」

クレドネエはそういうと自分の小振りな剣を抜きロスペロツソの首級を取った。

そして魔法の背負い袋に放り込むと、ちよつと手を合わせて、それから慌てて立ち去った。

仲間の装備まで剥ぐのは気が引けたという事なのか。それとも手柄を横取りするような行為に後ろめたさを感じたのか。

しかし彼なりに仲間たちに報いるつもりではいた。

ロスペロツソに賭けられた懸賞金を得て、それで仲間達を称える像の一つや二つ、建ててやる。それぐらいはしてもいいと思っただのだ。

が、この後髪を引かれるような思いは一体何なのだろう？

洞穴を出たクレドネエは後ろを振り返らずに、一目散で逃げ出すように走り去っていった。洞穴から風の唸り声が聞こえる。それが自分を非難している。彼は、そう思わずにいられなかった。

頬に冷たいものを感じてポルメリアは意識を取り戻した。

目を覚ましても真つ黒な洞窟の中であつたから、自分の強力な治癒能力の為に結局死ななかつたのだと、彼女はぼんやりと理解した。

剣を杖にして立ち上がる。傷は癒えていたが失つた血まで取り戻したわけではない。

不明瞭な意識の中で鈍痛を覚えながら辺りを見回した。

かたわらの岩壁には血袋を叩きつけたような痕があつた。

地面に落ちてしている小さな血塗れの衣服から、それがドウルワイトのなれの果てだと彼女は理解した。

炎に焼かれたのはリュイスだつた。ちょうど彼ぐらいの背丈はありそうな黒炭の何かが、黒く焦げた地面に転がっていた。

巨大なロスペロツソは首のない姿で横たわり、完全に息の根を止められている。

トウルスはどうしたのか。クレドネエは？

破損した鎧の破片が癒えた体に食い込むだろうに、彼女は足を引きずって他の仲間を探した。

ロスペロツソの体を回り込んだ時、トウルスの白い頭髮が見えた。

彼は巨人用の大剣を抱えて、戦いに疲れ果て休息を取るように座っていた。その顔には穏やかな微笑が浮んでいる。

思わず彼女は声をかけようとして、そして息を飲んだ。微笑みを浮かべた彼の肌の、あまりの白さに絶句してしまつたのだ。

『龍殺し』・・・死んでいるの？』

トウルスは彼女の問いに答えなかつた。ただ満足そうな微笑みを浮かべて、座つたまま事切れていた。

彼女の青い瞳からとめどなく涙が溢れて、溢れて、止まらなかつた。

汚れた白い頬を伝って、いつまでもいつまでも涙は流れ続けた。

声を殺して彼女は泣いた。

騎士としての責任をまつとうでなかつた事や、自分だけが生き残つた事への後ろめたさはなかつた。

大切な仲間達を全て失つてしまつた。その悲しみだけで彼女の涙はできていた。だからいつまでも尽きぬ涙が頬を流れ続けた。

私はまた、一人きりになつてしまつた。

孤独な魂が負つた傷は、決して癒える事はなかつた。

都城メルクスは時ならぬお祭り騒ぎになつていた。

クレドネエがロスペロツソの首を持って、近隣諸国の中で一番栄えているメルクスを訪れたからだ。

ここにはロスペロツソの為に家や財産や家族を失つた人々が難民として集まつてきている。

そこへクレドネエが、ロスペロツソが死んだ印を持ち込んだのだ。

くわしい事情など二の次だった。またクレドネエも仲間を見殺しにした事など一言も喋るはずがなかった。

かくしてうやむやのうちに彼は『龍殺し』の英雄となり、人々に称えられるようになった。褒賞金は勿論のこと、人々の尊敬や関心を一身に受けるようになったのだから、今まで日陰の者として暮らしてきた彼にとって悪かるうはずがない。

メルクス公爵や諸貴顕から歓待を受け、人々の歓呼を浴び、それはもうちょっととした王様気分だった。

そんなメルクスの町に、傷は癒えても心は満身創痍のボルメリアが辿り着いた。

死んだ仲間たちの埋葬を終え、破壊された鎧を応急修理して、そして名をあげようとする者、

彼女を倒して悪徳領主から褒賞金をもらおうとする襲撃者たちを退けながら、疲れきった体をひきずって、ようやくこの大都会に辿り着いたのだ。

彼女にとつてここはケルマディクまでの通過点に過ぎない。

彼女にとつてはそこにある孤児院にしか、もはや家族と呼べる人々はいない。

鎧の修理も頼まなければならない。だからメルクスには、ほんの少し立ち寄つたに過ぎない。

最初彼女はこのお祭り騒ぎに面食らった様子だった。そして宿の亭主に何事かと尋ね、その理由を知って更に驚く。

「ロスペロッツを倒したクレドネエ？」

「そうさ。お客さんは運がいい。今日はその凱旋パレードの日さ。

ほら、すぐその大通りを『龍殺し』の英雄さんが通る事になっている。

いやー、一時は難民が山のように押し寄せて、ここにも赤い竜がやってくるんじゃないかと気が気じゃなかったんだが、これで一安心さ。公爵様も善政を敷いておられるし、メルクス万々歳ってわけさ」

宿の亭主の言葉を最後まで聞かずにボルメリアは黄金の三つ編みを揺らして飛び出していた。

大通りには既に人込みが鈴なりになっている。小柄なボルメリアは人込みをすり抜けつつ前に進む。

しかし無理に出る事はできない。押すな、と言われて恐縮し彼女は足を止めた。

通りの向こうから歓声が沸き起こる。公爵の騎士団に先導されてパレードがやってきたらしい。

実際メルクス公爵がロスペロッツを倒す為に何かをしたわけではない。

だが赤い竜に襲われて故郷を追われた人々を受け入れてきた功績は誇っても良いだろう。

パレードを企画した者は巧みにそれを演出して、メルクス公爵領の諸都市の旗をパレードに加えている。

続いて『平和の到来』を演出する為、苦難の末にメルクスで生きる場所を見出した難民の代表者たちが着飾って続く。

付き添いには豊饒や平和の女神の女神官たちが、にこやかに春の訪れを象徴する着飾った衣装で一人一人についている。続いてメルクス公爵領の平和と安定を司る騎士と役人たちの列が続く。

実際彼らが何をしたという訳ではなかったが、メルクスの都城を運営しているのは彼らだ。

そこでボルメリアは気づいた。これはロスペロッツが滅んだ事を口実に行われる都城メルクスのお祭りなのだ。災害をもたらした竜が滅びた事を人々に告げる儀式なのだ。

一転して芸人達の賑やかな集団が、公爵お抱えの楽団と共に現れる。陽気なそれは、やはり平和と繁栄の象徴だ。

そして最後に『英雄』がメルクス公爵とともに現れた。人々の歓声が大きくなり、紙ふぶきが舞った。

その中で無蓋の馬車に乗ったクレドネエが、満更でもなく人々の歓呼に答え手を振っているのが見える。

その目立たない風貌を見てポルメリアはクレドネエ本人がそこにいると知った。彼女の頬に浮んだのは、不思議な笑みだった。クレドネエが仲間たちを見捨てて逃げたのだとは思わない。

彼がああ激しい戦いに参加したとしても生き延びる事ができたかどうか、解らない。ポルメリアさえも死を覚悟した。そして他の仲間たちは全て死に絶えた。

クレドネエがロスペロツソ討伐の功を独り占めしていると思わないでもない。しかしポルメリアはその事を責める気にはなれなかった。

自分を除いて皆死んでしまったと思っていた。だが彼は生きていた。例え仲間の危機を助けなかったとしても彼は戦士ではない。それよりも何よりもポルメリアは嬉しかったのだ。一人でも生きている仲間がいたのだから。

確かに不正を憎む善なる軍神の下僕としては、クレドネエの行為は褒められるものではない。それでも、生きていてくれたのだ。生きていればこそ、憎む事も愛する事も、その全てを始める事ができるのだから。

自分では、彼女は嬉し涙を浮かべたと思っている。そして栄光の中にいるクレドネエに背を向けた。冒険はともかく、戦いに臨む事を嫌っていたクレドネエは、これから莫大な褒賞金と眩い名声に包まれて余生を送るだろう。それが彼の幸せなのだ。幸せであるなら、それでいいのだ。

その事を確認した彼女は人込みに逆らって歩き始めた。

自分と関わった人の幸せを見届けた彼女は、戦う事が定め、自分自身の運命に戻らなければならない。けれども彼女自身も幸せだった。守るべき人々が平穩に暮らしていく事が彼女の望み。だからクレドネエの幸せは彼女の幸せでもあるのだ。

クレドネエに背を向けた彼女は彼の幸多き未来を祈った。メルクスの人々の幸せを祈った。それが彼女自身の、偽りのない望みだった。

だが、無蓋馬車の上から目敏くポルメリアの姿を見つけたクレドネエの顔色は変わっていた。彼女が見せた、嬉しそうな、悲しそうな微笑みを彼は見てしまったのだ。

愕然とした彼は急に意気消沈し、肩を落とした。

「どうされた、英雄殿？」

脳天気なジャーノ公の問いかけにクレドネエは真つ青な顔で振り返った。

「いや・・・なんでもない。なんでもないんです」

慌ててそういうが、もはや心が晴れる事はなかった。

『城砦落し』が生きていた。全ての不義不正に鉄槌を下す、あの少女が！

心躍るパレードが急に厭わしくなる。

何処かに隠れる場所はないか？逃げる場所は？

だが大通りを行く無蓋馬車に隠れる場所などある筈もない。

日の当たる場所に何故自分はあるのか？日陰に隠れてひっそりと生き延びる事こそ、自分に似つかわしい筈なのに。

もはやメルクス市民の歓声は彼にとって遠いものだった。  
晴れ渡った空が憎い。雨でも降ればパレードはお開きになるだろうに。

クレドネエは真剣にそう考えていた。